

経済史における人間像 —大塚史学の方法をめぐって— 問題提起

1997年6月28日

小野塚 知 二

はじめに

人間類型論、とりわけ近代的人間像の提示は、いわゆる「大塚史学」（比較経済史）の方法上の重要な特徴であり、現実の日本社会に対して大きな影響を与えてきた。ところが、本学会の共有の財産であった人間類型論が正面から議論される機会は長らく極めて稀で、それはいわば「神棚」に祭り上げられたかのような状況にある。創立50周年を迎えるにあたって、人間類型論・近代的人間像を経済史（および社会科学）研究の方法上の問題として改めて取り上げ、近年の研究成果も広く参考にしながら、その意義と限界や可能性について、率直に議論し、今後検討すべき論点を確認しようというのが今回の春季総合研究会のねらいである。

I なぜ人間類型論に注目するか

いまさら大塚史学の人間類型論でもないだろうという考えもあろう。曰く、近代化の人間の基礎を論じ、人間変革の重要性を指摘したという意義はあるが、いわば過去の遺産であって、現在もっと重要な論点は他にあるのではないか。あるいは、先験的であれ外挿的であれ何らかの人間像を予め前提にして様々に個性的で豊かな現実を裁断することは歴史研究にとって有害ですらある、社会の問題を人間のそれに矮小化しようとする社会科学的に誤った発想である、西欧近代社会の主体的担い手は大塚史学の言う近代的人間類型ではとらえきれない、端的に言って西欧近代中心主義である、等々。人間類型論を葬り去るための、あるいはせいぜい祭り上げてしまうための口実は何にもいくらかでも思い付きそうである。それでも私は以下のような理由から人をどうとらえるかを改めて議論することに重要な意味があると考えている。

第1に、大塚自身が主張してきたことだが、「人間類型論は、社会科学における在来の理論の妥当性を相対化する…ことによって、社会科学の理論をいっそう現実と密着させ、その意味で精密化していくことができる」と考えられるからである。経済学は言うに及ばず、社会科学の諸理論は何らかの人間類型（しかも多くの場合、近代的なそれ）を前提にして形成されているのだが、各地域・「文化圏」はそれぞれ独自の人間類型をもっているし、それは時代によって変わる可能性を含んでいる。そうだとすると、理論の有効性（現実への適用可能性）を

検証し、理論を不断に鍛え直すためには、理論とまったく無縁の研究をするのでもない限り —私は完全に没理論的な研究は不可能であると考えてるが— 人間類型論に自覚的に取り組む必要は、理論家にとっても諸理論に球を投げ返そうとする歴史家にとっても決して小さくないと言えるのではなかろうか。大塚は人間類型論の今後の課題として理論の鍛錬の他に、究極的に比較しえない歴史的個体の個性記述をあげ、また、人間類型論が関心を集めている背景として南北問題（これはとりあえず理論の鍛錬の問題に集約されよう）と「人間疎外の雰囲気」・「精神的貧困」（「高度経済成長に伴って生じた社会全体の急激な経営化、いわゆる管理社会化」に根をもち、「自由がたてまえであるような社会にあって、その中でいきる人間の行動が厳しく型にはめられてゆく、そういうことが多くの、とりわけ若い人々の目に自由の喪失と映じた」問題群）の二つを指摘している。

とはいえ、あれこれの人間類型をやみくもに提示して、理論の限界をあげつらえば事足りるわけではない。「ポスト・モダン」を気取っていられたのは既に遠い過去のこととなり、いまや真剣に近現代後の社会を展望することを否応なく求められているとするなら、社会科学研究者は近現代社会を大掴みに相対化しなければならない。ここでは、上に述べたような理論の鍛錬にとどまらず、諸理論が多かれ少なかれ前提にしてきた近代的人間類型そのものを相対化することが必要となろう。それは、われわれが社会を認識する際にほとんど無意識的に「人はこう思い行おうであろう」と考えてしまうほどに、われわれに染み込んだある種の「近代性」を相対化することに究極的にはなるだろうと考えている。つまり、近現代社会をとらえ直す際にわれわれは、近代的人間類型の有効性がどこまで担保できるかという問題に直面せざるをえないと考えるのだが、それが、今回の春季総合研究会のテーマに人間類型論を取り上げようとした第2の理由である。

以下では、大塚史学における人間類型の作られ方と用いられ方を概観した上で、以上のような観点から何を議論したいと考えているかを示すことにしよう。

II 人間類型の作られ方と用いられ方

大塚史学が人間類型を語る場合、そのほとんどは近代

的（あるいはロビンソンの）人間類型を論じており、それとの対比でその他の、たとえば「インド的」、「共同体的」、「ベイラント的」人間類型などが言及される。したがって、ここでも近代的人間類型に即して、その作られ方と用いられ方を見ておこう。

(1) 作られ方

作られ方を見る際にまず注目しなければならないのは、近代的人間類型とは M. ヴェーバーの「資本主義の精神」を内面を持つ人間として提示されているということである。よく知られているとおり、また大塚自身も随所で述べているように、大塚史学の人間類型論はヴェーバーの業績、殊にその宗教社会学に多くを負っている。ヴェーバーは近代資本主義の主体的担い手の行動を内面で決定した精神・エートスを「資本主義の精神 *Geist des Kapitalismus*」と明確化したのだが、それは L. ブレンターノの「資本家精神 *kapitalistischer Geist*」とは明瞭に異なり、資本家と労働者の双方を担い手とする精神であった。したがって、それは単に「金儲け」一般を良しとする精神ではなく、より包括的な価値観や行動規範を表現しているのである。次に、これまた大塚自身がたびたび述べたように、近代的人間類型とは経済学の前提とする「経済人 *homo economicus*」と本質的に同じことを指しているともされる。そして、近代的人間類型の最も端的な表現として大塚が繰り返し言及したのが、D. デフォウのさまざまな著述、殊に『ロビンソン・クルーソー』であり、B. フランクリンの『自伝』であった。また大塚は『ロビンソン』にヴェーバーの言う「資本主義の精神」が描かれていること、マルクスが『ロビンソン』から経済人を読みとっていたことも指摘している。

ここから、次の二つのことを指摘できよう。まず第1は、近代的人間類型が史実から析出された類型というよりは（むしろ史実や先行研究を踏まえていないということではないが）、デフォウ、フランクリン、ヴェーバー、マルクスらの著述の解釈を通じて構成されたものという性格が強いことである。人間類型がこれらのテキストの解釈を経て選択的に構成されたということには、すぐ後に簡単に触れるように、何ごとかを説明し主張する（用いられ方の）意図が明瞭に表現されていると考えられよう。第2は、このように近代的人間類型がさまざまなテキストの解釈から構成されたのであれば、そうした解釈の妥当性が問題となるであろう。

(2) 用いられ方

大塚史学の近代的人間類型（およびその原点としてのヴェーバーの「資本主義の精神」論）は、まず何よりも、近代資本主義とその担い手の起源をめぐる周知の論争—遠隔地市場・国際的契機、主に都市を基盤とした特権的で投機的・冒険的な商人・金貸し、流通・商業の先行

発展とそれによる生産の再編を重視する説と、局部的市場・国内的契機、主に農村を基盤とした着実かつ合理的な経営を営む中産的生産者層、生産の主導による流通・金融の再編を重視する説との論争—の対立点を際立たせ、後者の妥当性を主張するために用いられている。ここでは、近代の合理的産業経営は「金儲け」一般の中からではなく、目的合理性を徹底的に追求するような人々の営為の中からこそ発生し、こうした人々を出自とする労働者には「高賃金の経済」が成り立つとされる。

しかし近代的人間類型はこの点にだけ用いられたわけではない。大塚はヴェーバーを解釈しながら、「資本主義の精神」を、発生史的に「世俗内的禁欲」を特徴とする「プロテスタンティズムの倫理」にまで遡って、「隣人愛の実践」（召命＝仕事そのもののために仕事を行う価値合理的な職業倫理）と「利潤の追求」（営利）という二つの中心を有する楕円的な構造として説明する。この観点を大塚は現実批判の武器として用いた。伝統的な秩序や規範から自立せず、ときには国家権力に寄り掛かることまでして貪婪に営利のみを行う現状を憂い、倫理を忘れバブルに走ることを最後まで戒め続けてきた。大塚は「資本主義の精神」の重心が次第に「倫理」から「営利」へと移る、すなわち「経済人」に純化するという抗いがたい傾向を認めていたから、その現実批判は彼の思想的な表明であったとすることができる。

(3) 用いられ方と作られ方

近代的人間類型は、その用いられ方に適合的に作られている。「貿易商人や大地主」と「地道に働いて神に感謝しながら勤労によって財をなしつつあった『中産的生産者層』の「間を揺れながら」も「最後には勤労による合理的な生活様式が大切だと悟った」デフォウに依拠したのも、『中産的生産者層』の利己的な「営利」の面だけを揶揄的に強調したスウィフトを退けたのも、また、伝統的倫理の残滓（たとえば怠惰）と貪欲な営利の両面と闘い続けたフランクリンに注目したのも、まさに目的合理的な学問の方法であった。近代的人間類型が直接的には資本主義起源論争との関わりで、しかも、おそらくは現在にいたるまで少数派であり続けたヴェーバー説を支持する立場から用いられたのも、現実批判という目的に適合的であると考えられたからではなかったか。

大塚史学が戦後幅広い共鳴者を獲得した理由として、それが伝統社会（封建制）から近代社会（資本主義）への移行を最も体系的に説明する道具を提供したからであることは否めないにしても、さらに共鳴の背景には強烈な現実批判の意識が作用していたと思われる。他方、大塚史学に対しては同時にさまざまな批判が登場したのだが、大塚史学と批判者との相違は必ずしも実証的に克服されるうる性格のものではなく、直接的には方法上の相

違であり、さらには方法選択を決定した学問の目的意識の相違（現実社会への自覚的な関わりを明瞭に表現するか否か）であった。共鳴と批判のそれぞれは究極的には大塚史学に内在した思想を根拠にしていたのである。

Ⅲ 問 題

人間類型論を改めて取り上げようとするこの研究会で、その背景にある思想を受容すべきか拒否するかという問題を立てることは、学会が思想・価値観を共有する運動団体ではない以上、相応しいことではない。とはいえ、大塚史学の方法には特有の思想が分かちがたく結び付いている。さらに、やや乱暴に言うなら、社会科学とは認識された事実のある面を抽象して、諸事物や諸主体の関係や構造、変化・動態の法則性、個性等々について何らかの像を提示することであるとすると、そこには何が重要で何がそうでないかという選択がなされざるをえず、その選択の背後には何らかの価値判断が作用せざるをえないであろう。それゆえ、方法を論ずることは学問と思想の関係という古くて新しい問題から完全に自由ではない。このことを承知したうえで、先に進もう。

以下では、社会科学の方法としての人間類型論に意義があるものとして、いくつかの問題を提起するつもりである。むろん、人間類型論はそもそも社会科学の方法として有害ないし無益であるという主張もありうるのだが、私は、人の思考や行動の特定の型を前提にしない社会認識は不可能であるから、そうした主張は人間類型に縛られない自由な社会認識ではなく人間類型に無自覚な社会科学を意味することになると考えている。人間類型論の意義付けの仕方についても、意義の有無についても、さまざまな見解があると考えられるので、その点は討論の中で深めていただきたい。

(1) 共同性への関心の希薄さ

人間類型論の意義を何らかの仕方で承認するからといって、それは必ずしも近代的人間類型を無条件に受容することを意味しない。ここでまず提起したいのは、近代的人間類型が人の共同性のあり方をどのように取り込んでいるかという問題である。私見を先に示すなら、近代的人間類型では人が他者といかなる関係を取り結びうるかという点について原子論的人間＝社会観に特徴的な契約説的／功利主義的な想定がなされているが、人が他者とのいかなる関係に置かれているか、あるいは他者といかなる関係を取り結ぼうとしているかということへの関心は極めて希薄である。たとえば、「隣人愛の実践」とは他者に役立つ財貨を産み出した結果として利潤が獲得されることによって初めて確認できることなのだが、それはある共同性に既に組み込まれた人の倫理でも、何らかの協同性を意識的に志向する人の倫理でもなく、まさ

に「神の前に一人で立つ」原子論的個人の倫理である。

あるいは近代的人間類型を経済学の理論的前提としての「経済人」と理解するなら、各人が利己心を追求して自由な経済活動を行うからこそ市場メカニズムがよく機能し、需給が過不足なく釣り合い、共同性はそのこと（功利的な契約）の結果として物的に成り立ちうるのだが、契約以前に定まっている関係の型や意識的に追求された協同性といった共同性のあり方は近代的人間類型には欠落しているのである。

こうした欠落がなぜもたらされたのか、また欠落の意義と限界は何であるか、これが第1の問題である。共同体や伝統的秩序から脱却した者たちこそが近代資本主義の担い手でありえたことを強調する大塚史学にあっては自由意思以前に定まった関係に取り込まれたままの人は変革の対象でしかなかったし、「皆で助け合って立つ」ことを志向する協同性の原理（宗教的な愛徳・互助・慈善や広義の社会主義がこれに含まれるであろう）は「一人で立つ」ことを重視する観点から軽視されたということなのだろうか。

(2) テキスト解釈の問題

上の問題は、さまざまな共同性のあり方への関心を欠落させた近代的人間類型がいかにリアリティを低下させているかという問題と、それにもかかわらずなぜリアリティを保持し続けているかという、一見すると矛盾する二つの問題に変換できる。ここでは前者をテキスト解釈の問題として提起してみよう。大塚の経済人的『ロビンソン』解釈に対しては既に本日の報告者の一人である岩尾龍太郎が、目的合理性をはるかに超えた過剰な蓄積と内外分節化という「異常性」を指摘しているが、ここではもう一つ、デフォウが南海の孤島に唯一発生させた人間関係が近代的人間類型ではほとんど無視されていることの意味を問いたい。ロビンソンとフライデイはロビンソン（＝デフォウ）によってマスター＝サーヴァントの関係に組み込まれ、「名もない未開人」にはフライデイという名と言語（英語）と合理的生活態度が与えられるのである。これとは別に、フランクリンの『自伝』ではさまざまな徳目がうわべを取り繕うことから徐々に内面化していく過程とともに、「ジャントー・クラブ（修徳同盟のごときもの）」を通じた集団的自己規律の様が生き生きと描かれている。デフォウは自由意思以前に定まった関係の型を描き、フランクリンは（そしておそらくは、「啓蒙」と「進歩」をモットーとしたフリー・メイスンリーもその原点においては）協同性を通じた自己陶冶を論じている。この二人がそれぞれ近代人たることを選択した人物であるとすると、実在の近代人がその著作の中で自覚的に表現したこれらの共同性のあり方を無視することによって近代的人間類型のリアリティはいかに

損なわれているか、これが第2の問題である。

(3) 「経済人」のリアリティという問題

こうした問題にも関わらず「経済人」は圧倒的なリアリティをもって迫ってくる。むしろ、「経済人」においては「倫理」の有無は必ずしも問題とはならないのだが、それは今日まで経済学の理論的前提であり続けることができたほどに、近現代（殊に18世紀末以降の）の人間と社会を規定し続けてきた。たとえば18世紀末以降のイギリスに即して言うなら、市場によって達成される結果としての共同性以外のあり方を否定する論理は、1799/1800年の全般的団結禁止法にも1824/25年の団結禁止法撤廃法にも貫かれ、労働者の意識的協同性を禁圧しようとした。1834年救貧法は下層民衆にまで個人的自立を強要した。1830年代以降の工場法をめぐる議論の過程では「自立した個人 free agent」であるか否かが法の適用対象を決定したとすら言いうる（ここで近代的人間類型は、「大人の男」以外の人つまり「女・子供」が「一人前」とは見なされないというフェミニズムの提起した巨大な問題群に逢着することになる）。さらに、ギルドの諸理念を19世紀に実現しようとした成人男子熟練労働者の組合すらが「集団を通じた個人的自助」や「需給法則による慣習的高賃金の維持」という奇妙な主張をせざるをえなかったのである。翻って1980年代以降はサッチャリズムに端的に表れているように素朴な「市場万能」論が優勢であるが、その背後にも「経済人」の根強い影響力を見ることができよう。容易には拒否も無視もできないほどに「経済人」がリアリティをもっているのはなぜか、われわれを規定し続けてきた「経済人」とはそもそもいかなる規範なのか、これが第3の問題である。

(4) 「近代人」の可能性

共同性に関して問題がありながらも「経済人」がリアリティをもっているのは、われわれの内に「近代人」たろうとする衝動が潜んでいるからなのだろうか。そうならば、われわれにはどのような「近代人」であることが可能か、それとも、もはやいかなる意味でも「近代人」であることは不可能なのかという問題を、学問の領域を超えてしまう危険性もあるのだが、やはり最後に問いたい。

「個人の自立」や「営利追求」だけが一人歩きすることが現実にさまざまな問題を引き起こしてきたことをわれわれは充分すぎるほど知っている。大塚自身が現代の病弊として指摘した「人間疎外の雰囲気」とは「近代人」と深いところで結び付いているのではないだろうか。「職業倫理」と「営利」の二元論的構成とはいっても、その「倫理」が単に「仕事そのものための仕事を価値合理的に追求すること」しか意味しないのなら、そこには「社畜」や「過労死」がもたらされる可能性すらある。それ

ゆえ「倫理」には「仕事」以外の価値が含まれなければならないまい。では「隣人愛」、「友愛主義」、「相互承認要求」等々を内面化する条件は何であろうか。

「隣人愛」が担保されたとして「営利」—あるいは、決して満たされることのない無限の物欲—の追求を承認することは何を意味するのであろうか。環境問題や資源問題の原因が市場経済システムや近代産業文明と親近的な関係にあることは既にさまざまに指摘されているのだが、「持続」や「生存」という課題を見据えたとき、たとえば加藤尚武の環境倫理学は個人・自由・人権・欲望追求などおよそ「近代的」な全てを否定し去った彼岸に「地球全体主義」を展望している。「近代人」はもはや不可能なのだろうか。

むすびにかえて

結局、私は思想や価値観と無縁のところ学問を論ずることができなかつたようだが、少なくとも人間類型論がわれわれに投げかけている「重さ」は自覚しているつもりである。この恥知らずな問題提起でも今後の（今日限りではない）討論の出発点となるなら率直に嬉しい。どのような批判であれお叱りであれ大いに期待したい。

最後にひとこと。今回のテーマは誰が口火を切っても大きく扱いにくいと言えよう。それゆえ研究会の持ち方としては、論点提示型の比較的短時間の報告とすること、複数分野にまたがる形の企画とすること、討論時間を長くして出席者ができるだけ議論に参加できるようにすることの3点に留意したい。小田中氏には、近代的人間類型の用いられ方や可能性をめぐる問題について、岩尾氏には大塚のロビンソン解釈について、藤井氏には大塚の生きた時代とそれ以前の日本の社会認識における人間像をめぐる、深貝氏には経済学における人間像との関係について、それぞれいくつかの論点を示していただけるものと思う。わずか20分という限られた時間でこの厄介なテーマで話すことを引き受けていただいた四氏には本当に感謝している。ただし、本日の議論を全体としてどのように「誘導し、まとめる」という「設計」はまったくしていない。したがって、何が飛び出すかわからない期待と恐ろしさがあるが、司会を引き受けていただいた大森氏・石原氏にとっては恐怖以外のなにものでもないことと思う。そこで司会者には討論の論点の立て方、その順序、討論の時間配分などについて全権を一任することとしたい。むしろ両氏は権力のために権力を行使するような人間類型ではないからこそ一任できるのだが、仮に討論の過程からいくつかの重要な論点が抜け落ちるようなことがあったとしても、それはこうした企画を立てた研究委員会の責任であって、司会者の責任でないことは言うまでもない。